

環境 NEWS (第28回)



全日本サーフキャスティング連盟本部 環境部

マイクロプラスチックが海洋生物のみならず人体にも悪影響をもたらすことが指摘されています。我々全日本サーフ会員は、これを防ぐために海岸のクリーンアップ活動を継続実施しています。

では、そのおもとになる海洋プラスチックごみはどこからくるのか、令和7年5月の水産庁資料『漁業における海洋プラスチックごみ問題をめぐる状況と対策』から一部記事をご紹介します。

こんな状況では、我々が少々ごみ拾いをしても大勢に影響がないと思われるかもしれませんが、先んじて一歩を踏み出し、さらに継続実行していくことには大きな意義があると思います。単に他国のせいにするのではなく、せめて眼前の海岸はきれいにしましょう。次の世代のためにも。

釣り場にごみが散乱していたら悲しくなります。気持ち良い環境で楽しく釣りをしたいですね。

海洋プラスチックごみの流出量は、様々な推計が存在。

EUNOMIA(Eunomia Research & Consulting Ltd)の推計によると陸域からの供給は8割(995万トン)、漁業からの供給は約1割(115万トン)。

Jambeckら(2015)の推計によると、480万トン～1270万トンのプラスチックごみが海洋に流出し、日本からは2～6万トンが流出したとされている。

中国及び東南アジアからの流出が多いことがわかる。

環境省の行った令和4年度39都道府県・78地点で行われた漂着ごみの調査によると、全体に占める漁具の割合は3割。

一方、同調査で、漂着ごみの表記言語の国別割合を見ると、漁業用の浮子(フロート・ブイ)は、瀬戸内海以外は、大半が周辺国からの漂着物であることがわかる。

我が国で製造・利用されるプラスチック類は年間約1,000万トン。そのうち、漁具として製造されるのは年間約2万トン(全体の約0.2%)前後と推計。

我が国のプラスチック製漁具の流出は、業界によるアンケート調査では2千トンと推計。

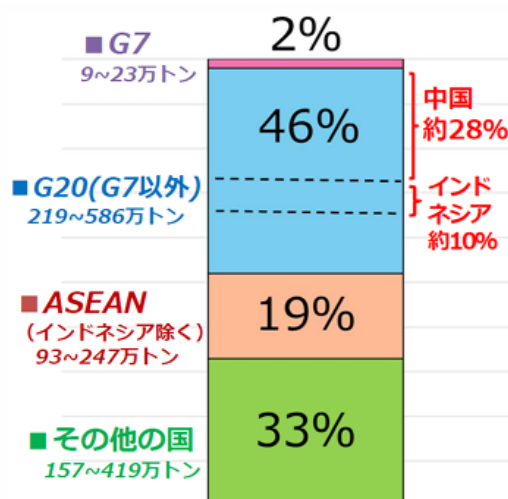
漁業・養殖業に欠かせない素材である一方、波浪等により流出し、ゴーストフィッシングの要因や漂着ごみによる沿岸環境への影響などから、批判の対象となる。

適正管理・処理を推進し流出を防止するとともに、資源循環の取組、代替漁具開発等を実施。

漁業者は、海洋環境・生態系保全のため、日頃から沿岸域の清掃活動を実施。

水産庁は、漁業者等の環境保全活動を支援。環境省は、回収した海洋ごみの処理費用について自治体を支援。両省庁が連携し、漁業者による海洋ごみの持ち帰りを促進。

1位	中国	132～353万トン/年
2位	インドネシア	48～129万トン/年
3位	フィリピン	28～75万トン/年
4位	ベトナム	28～73万トン/年
5位	スリランカ	24～64万トン/年
6位	タイ	15～41万トン/年
7位	エジプト	15～39万トン/年
8位	マレーシア	14～37万トン/年
9位	ナイジェリア	13～34万トン/年
10位	バングラデシュ	12～31万トン/年
20位	アメリカ	4～11万トン/年
30位	日本	2～6万トン/年



※割合は流出量(推計)の中央値(877万トン)で計算(2010年)

出典: 環境省資料より(Jambeckら: Plastic waste inputs from land into the ocean, Science (2015))

水産庁